

おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころごし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。

しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり。

もししからば、南都北嶺にも、ゆゆしき学生たちおおく座せられてそうろうなれば、かのひとにもあいたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

第二章「身命をかえりみず」

第4組 極樂寺住職

巖城 孝憲

text by Takanori Iwaki

関東の地に生まれた念仏者の僧伽を離れて、宗祖が京都へ帰洛されたのはだいたい六十歳を少し過ぎた頃と言われている。その後の京都での生活も、関東の門弟の方々の支えによっていたことが、『後消息集』『末燈抄』などによって知られる。信心の問題を、関東の門弟たちに手紙でていねいに言葉を尽くして返信されているのが分かる。ところが、この第二章の宗祖の言葉は、関東の門弟たちの間に切迫した状況が起こり、手紙には収まりきらない、直接に確認せずにはおれないような問題が持ち上がり、門弟たちが「身命をかえりみず」、師のもとへ上京することとなった状況が推測される。そのため非常に張りつめた緊張感のある言葉になり、曾我量深師は、みづからその場に居て見聞いた人でなければこれは書けない文章であると言われて、著者唯円がそれら門弟の中の一人であったことは疑いえない、直接にこの文章からくる感銘がそれを証明しているとされている（『歎異抄聴記』東本願寺出版部）。

その切迫した事情は、古来より二つ挙げられている。一つは、日蓮上人が、四箇格言で「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」と厳しい言葉で批判し、関東で念仏の教えに動揺が起こったことである。日蓮は、法華経以外の經典の教えは、法華経の真実を明らかにするまでの衆生引入の手段としての方便の教えであるとし、浄土往生をいう念仏の教えは無間地獄に墮し、悟って仏となる禪の教えは生死を出離できない天魔となり、鎮護国家の真言は亡国の教え、一

隅を照らし道心ある者を国宝であるとする天台大乘戒は国賊の教えであると批判した。時期的には丁度、宗祖が関東の地を離れ、京へ帰られた後の時期に相当する。

もう一つは、善鸞を関東へ派遣したことで起きた問題で、この問題のほうが関東の念仏者の僧伽が混乱するはるかに深刻な問題であった（宮城顕講述『歎異抄講義二』歎異抄講義刊行会）。関東の門弟方の要請によって宗祖は善鸞を名代として派遣されたが、その関東の念仏者たちの間に起こった問題とは、「専修念仏のともがらの、わが弟子ひとりの弟子という相論」（『歎異抄』第六章、聖典六二八頁）ということであったろうと言われている。関東の同行者たちの間の問題を善鸞は解決できずに、とうとう善鸞は、夜ひそかに私ひとりが父親鸞聖人から本当の教えを聞いたのだと主張して解決しようとしたらしく、問題が深刻化していった。その結果、宗祖はわが子善鸞（慈信）を義絶された。

自今已後は、慈信におきては、子の儀おもいきりてそうろうなり（聖典五九七頁）

「おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり」と一言で言い切られている。おそらく関東の門弟方が宗祖に問いかけた問いは、日蓮上人が言っていることは本当なのか、善鸞の言っていることは本当のことなのか、そういう問いであったに違いないが、じっと聞いておられた親鸞聖人は、そういうことには一切答えずに、命がけで上京して来られた問いは「ひとえに往生極樂のみちをといきかんがため」であると断定される。いのちが真に求めているものは、宗祖の言われる「身命をかえりみずして来たらしめたまう御ころざし」に違いない。本当の問題はいつも他を問う問題ではなく、自己を問う問い、自己が問われる問いである。信心の動揺こそが本当の問題だったのであり、深く自己が歎異される場へと転ぜしめられていく。自己に真実の信が問われた場となり、深く心に刻まれた師との出遇いの場になっていたことが、第十章の「そもそもかの御在生のむかし、おなじころざしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにしてころを当来の報土にかけしともがらは」（聖典六三〇頁）と述懐している唯円の言葉が、そのことを表わしているのではなかろうか。